

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「あなたはイスラエル人に命じて、
ともしびを絶えずともしておくために、燈火用の質の良い純粋なオリーブ油を持って来させよ。
3. アロンは会見の天幕の中、あかしの箱の垂れ幕の外側で、
夕方から朝まで主の前に絶えず、そのともしびをととのえておかなければならない。
これは、あなたがたが代々守るべき永遠のおきてである。
4. 彼は純金の燭台の上に、そのともしびを絶えず主の前にととのえておかなければならない。
5. あなたは小麦粉を取り、それで輪型のパン十二個を焼く。
一つの輪型のパンは十分の二エパである。
6. それを主の前の純金の机の上に、一並び六個ずつ、二並びに置く。
7. それぞれの並びに純粋な乳香を添え、
主への火によるささげ物として、これをパンの記念の部分とする。
8. 彼は安息日ごとに、絶えずこれを主の前に、整えておかなければならない。
これはイスラエル人からのものであって永遠の契約である。
9. これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。
これは最も聖なるものであり、
主への火によるささげ物のうちから、彼の受け取る永遠の分け前である。」
10. さて、イスラエルの女を母とし、エジプト人を父とする者が、
イスラエル人のうちに出たが、
このイスラエルの女の息子と、あるイスラエル人とが宿営の中で争った。
11. そのとき、
イスラエルの女の息子が、御名を冒瀆してのろったので、
人々はこの者をモーセのところに連れて来た。
その母の名はシエロミテで、ダンの部族のディブリの娘であった。
12. 人々は主の命令をまって彼らにはっきりと示すため、この者を監禁しておいた。
13. そこで、主はモーセに告げて仰せられた。
14. 「あの、のろった者を宿営の外に連れ出し、
それを聞いた者はすべてその者の頭の上に手を置き、全会衆はその者に石を投げて殺せ。
15. あなたはイスラエル人に告げて言え。
自分の神をのろう者はだれでも、その罪の罰を受ける。
16. 主の御名を冒瀆する者は必ず殺されなければならない。
全会衆は必ずその者に石を投げて殺さなければならない。
在留異国人でも、この国に生まれた者でも、御名を冒瀆するなら、殺される。
17. かりそめにも人を打ち殺す者は、必ず殺される。
18. 動物を打ち殺す者は、いのちにはいのちをもって償わなければならない。
19. もし人がその隣人に傷を負わせるなら、その人は自分がしたと同じようにされなければならない。
20. 骨折には骨折。目には目。歯には歯。

人に傷を負わせたように人は自分もそうされなければならない。

- 2 1. 動物を打ち殺す者は償いをしなければならず、人を打ち殺す者は殺されなければならない。
- 2 2. あなたがたは、在留異国人にも、この国に生まれた者にも、一つのさばきをしなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。」
- 2 3. モーセがこのようにイスラエル人に告げたので、
彼らはのろった者を宿営の外に連れ出し、彼に石を投げて殺した。
こうしてイスラエル人は、主がモーセに命じられたとおりに行なった。

説教

レビ記 24 章では、聖所のともしびと、常供のパン、主の御名を冒瀆する者へのさばきについて教えられています。まず 1~4 節では聖所のともしびについて次のように教えられます。

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「あなたはイスラエル人に命じて、
ともしびを絶えずともしておくために、燈火用の質の良い純粋なオリーブ油を持って来させよ。
3. アロンは会見の天幕の中、あかしの箱の垂れ幕の外側で、
夕方から朝まで主の前に絶えず、そのともしびをととのえておかなければならない。
これは、あなたがたが代々守るべき永遠のおきてである。

聖所のともしびというのは、幕屋の聖所の中を明るく照らす照明のことです。純金の燭台はメノラーと呼ばれます。一つの台から七つの枝が出ていて、それぞれの端にアーモンドの花に似たともしび皿があり、それらに火を灯しました。一度聖所に入ると、前方には天使の絵柄の至聖所の幕が、後方の聖所の入口にも天使の絵柄の幕が掛かり、さらには天井にも同じく天使の絵柄の幕が掛かっております。そのため、聖所で七つの灯火が灯される時には、前方、後方、さらには天井に羽ばたく天使らが、純金の燭台に明るく照らされて金色の光を放ち、あたかも天国の様子さながらであったことでしょう。反対に、このともしびがなければ、どんなに豪華絢爛な作りであったとしても、聖所の中は真っ暗で何も見えません。燭台のともしびは、天と地を照らす神の光、天国と世界を照らす神の栄光をあらわしておりました。

注目すべきは、ともしびの油を準備するのは全イスラエルの民の責任である、とされている点です(2)。聖所のともしびは「夕方から朝まで主の前に絶えず」灯し続けておかなければなりません(3)。しかもその油は、一切の不純物を取り除き、最上級の製法で作った「燈火用の質の良い純粋なオリーブ油」でなければなりません(2)。つまり、イスラエルのすべての民は、この聖所で輝く燭台の光に関心を持たなければならず、自分たちが供出する最上のオリーブ油のささげ物をもって、昼も夜も、絶えることなく、聖所のともしびを明るく灯し続けなければなりませんでした。

ゼカリヤ書 4 章には、預言者ゼカリヤが幻の中で金の燭台を見る場面が記されます。その燭台のともしびは、その左右に立つ二本のオリーブの木から神秘的に「金の管」を伝って流れ注がれるオリーブの油によって明るく灯され続けます。「主よ。これらは何ですか。」こう尋ねるゼカリヤに主は答えます。「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」有名なみことばです。でも、その有名なみことばは、実はこの場面で語られたものでした。それは不思議な神秘的な金の燭台の燃え方について問われた時に、神さまがお答えになったものです。「主よ。これらは何ですか。何で燃えているのですか。」「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって(燃え続けるの

だ。』

神の御霊という天的な恵みによって、消えずに燃え続けている、というのです。具体的には、金の燭台の左右に立って燭台に油を注ぎ続ける摩訶不思議なオリーブの木とは、大祭司と王のことで、大祭司ヨシュアと王ゼルバベルという「二人の油注がれた者」により、燭台は光を放ち続けるのでした(4:14)。これは後に来られるまことの大祭司にして王にいますイエス・キリストによって、この世界を明るく照らす神の栄光は絶えることなく力強く輝き続けるという意味でもありました。黙示録には、七つの金の燭台(教会を意味する)のともしびが絶えてしまわぬよう、みことばを教えながら、燭台の間をあちこち歩きまわる復活の主イエスさまのお姿が記されています(黙 1:12~20,2:1)。

このように、燭台は、神の栄光をあらわす教会、神の民を象徴しています。燭台の火は絶えず灯し続けておかなければならず、それは、何より、神さまの天的な恵みにより可能です。そして、同時に、みことばに応じて最上の純粋な油を供出し続ける、聖徒たちの不断の献身によって可能なのです。

5~9 節の常供のパンについての教えも基本的に同じです。これは「主の前のパン」、文字通りには「御顔のパン」です(8)。

5. あなたは小麦粉を取り、それで輪型のパン十二個を焼く。
一つの輪型のパンは十分の二エパである。
6. それを主の前の純金の机の上に、一並び六個ずつ、二並びに置く。
7. それぞれの並びに純粋な乳香を添え、
主への火によるささげ物として、これをパンの記念の部分とする。
8. 彼は安息日ごとに、絶えずこれを主の前に、整えておかなければならない。
これはイスラエル人からのものであって永遠の契約である。
9. これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。
これは最も聖なるものであり、
主への火によるささげ物のうちから、彼の受け取る永遠の分け前である。」

合計 12 個を 6 個ずつ二列に並べ、乳香を添えてそれを「主への火によるささげ物」としました。パンは安息日ごとに入れ替えられ、古いパンは「最も聖なるもの」として祭司が聖所の中で食べました。こうして 12 個のパンは、安息日ごとに取り替えられながら、「絶えずこれを主の前に、整えておかなければならない」のでした(8)。

どうしてこのような常供のパンが主の前に供えられたのでしょうか。その意味は何でしょうか。その意味は、一言で言えば、イスラエル 12 部族の絶えざる献身と聖別の表現です。もともと、「穀物のささげ物」の意味は、日毎の糧を与えてくださる神さまに感謝をささげて献身を告白する聖別の儀式でした。それがいつも神さまの前にあるのです。ずうっと、休まずに、あり続けるのです。一時だけでなく、いつも、常に、あり続けるのです。神さまの前に。日毎の糧を与えて生かしてくださる神さまへの感謝と献身の告白の証しが、いつも神さまの前にあるのです。つまり、常供のパン、または「穀物のささげ物」をささげなさいという神さまの教えは、単に神さまへの感謝の感情が盛り上がった時のみならず、絶えず感謝と献身を誓うことを要求しておられる神さまのみこころをあらわしています。

23 章で教えられた通り、私たちが神さまに生かされていることと救われている喜びと感謝は、週に一度の安息日に、さらには年に 4 度の祭りに於いて新たに確認すべきことでありました。そして、その喜びと感謝は、祭りの時のみならず、週に一度のみならず、昼も夜も、常に、絶えず、神さまの前に告白されるべきことなのです。

10~23 節では「主の御名を冒瀆する者」の話が紹介されます。イスラエル人を母としエジプト人を父とする混血

の者が、イスラエル人と喧嘩をする際に主の「御名を冒瀆して、呪」います(11)。何か喧嘩の弾みで、あるいは売り言葉に買い言葉で、いずれにしても「御名を冒瀆して、呪った」のでした。それで、それを聞いていた周囲の人々が、それを放っておかず、モーセを通して神さまに伺いを立てたところ、神さまはその者を石打ちにして殺すようお命じになるのでした。

13. そこで、主はモーセに告げて仰せられた。

14. 「あの、のろった者を宿営の外に連れ出し、

それを聞いた者はすべてその者の頭の上に手を置き、全会衆はその者に石を投げて殺せ。

15. あなたはイスラエル人に告げて言え。

自分の神をのろう者はだれでも、その罪の罰を受ける。

16. 主の御名を冒瀆する者は必ず殺されなければならない。

全会衆は必ずその者に石を投げて殺さなければならない。

在留異国人でも、この国に生まれた者でも、御名を冒瀆するなら、殺される。

「冒瀆する」とは「突き刺す、刺し通す」の意味です。「呪う」とは「軽蔑する、馬鹿にする」の意味です。

17~21 節では、人や動物を殺したり傷を負わせるなら、必ずそれに相当する復讐を受けることが刑法の規定として教えられます。つまり、そのように、主の御名を冒瀆して呪うことは神さまを刺し殺して亡き者とするに等しく、死刑のさばきを受けるということです。

結局、主の御名を畏れ敬うことが律法の土台です。主の御名を畏れ敬うことがなければ、これまで学んできた律法は全く無意味です。主の御名を畏れ敬うことがなければ、いくらみことばを学んでも、人のことばにしか過ぎないのです。でも、これまで学んできた律法は神のことばです。冗談ではありません。戯言でも虚言でもありません。まじめな神のことばです。嘘偽りない、真実な神のことばです。人のことばは、いくら聞いても、人を救うものではありません。人の人生を新しく造りかえることができません。これまで学んできたことは、神のことばです。これまで、神の民としての生き方を学びました。神の栄光をあらわす神の祭司としての生き方を学びました。そして、そのように生きる原動力は、安息日と年に四回の祭りにあることを学びました。そして、今日の 24 章では、神さまへの感謝と献身を表明するのは、年に 4 回だけでなく、週に一度だけでもなく、毎日、いつも、昼も夜も、絶えず、ということ学んだのです。

ここに集われた神さまに愛されている兄弟姉妹みなさんが、神さまを畏れ敬い、神さまの恵みによって生かされ、救われている喜びと感謝を絶えず神さまの御前にささげて、神の御名の栄光を世にあらわして生きていかれるよう、主の御名により祈ります。